

ネオ・ロイヤリスト時代のカンボジア文学

キン・ホツク・デイ／岡田知子訳

二十世紀半ばから始まったカンボジア現代文学は、国内の政治、経済、社会状況、そしてさまざまな文化システムと密接に係わり合いながら幾度となく革新を遂げた。政府はその時々々のイデオロギーに沿うように憲法を改正し、国歌を作った。度重なる政治、経済、社会の変化により、文学は、指導者のリズムに合わせて懸命に進んできたのである。

一九九一年十月、パリにおいて国連の下で、連合政府とカンボジア国（ベトナム抛りの旧カンプチア人民共和国）との間で和平協定に署名が交わされた。一九九三年五月に総選挙が実施されたが、クメール・ルージュ（旧民主カンプチア）の参加はなかった。国会が誕生し、第二回国会において新憲法が可決され、シハヌーク国王の署名を受けた。憲法第一条では、「カンボジアは国王が憲法、民主主義自由複数政党制に従って行う」、第五条においては「公式に使用される言語と文字はカンボジア語とカンボジア文字である」、また第七条では「カンボジア国王は財産を所有するが権力は持たない」と明記している。

カンボジアは、シハヌークが二度目の王位に就くことで再びカンボジア王国に戻った。ノロドム・ラナリットとフン・センの二名を首相とし、主要省庁はそれぞれフンシンベック党（旧シハヌーク派）とカンプチア人民党（旧共産グループ）のメン

バーで二名の大臣を持つに至った。一九九七年七月のフン・セン第二首相によるクーデターにより、援助国が一時的に援助を打ち切ったり延期したために、経済危機が訪れた。このような国際的な経済・政治的締め付けで、タイなど海外に逃れていたフンシンベック党及びサム・レンシー党のメンバーは帰国し、一九九八年七月の総選挙に参加した。国会は二院制となり、フン・センを首相、ノロドム・ラナリットを上院議長として再出発した。

これらのことだけを概観しても今世紀最後の十年で、政治的状況が急激に変化したことがわかる。ではカンボジア文学はこの政治状況に従ってどのように変化したのだろうか。

1 一九九〇年から一九九三年の文学

一九九〇年はカンボジアにとって特筆すべき重要な年であったと言える。というのは、カンプチア国政府と連合政府が、平和を求めて外交的にも政治的にもさまざまな方法を模索している時であったからだ。文学も前進への一歩のための新たな呼吸を待っていたかのようにだった。当時「文化出版舎」「革命の光出版社」等の国営印刷所は、かつてシハヌーク

が国家元首として中立政策をとったサンクム・リアツ・ニヨム時代（一九五五―一九七〇）とアメリカの強力な支持があったロン・ノル將軍による共和国時代（一九七一―一九七五）の文学作品を再出版した。一方、民間出版社も活動を始め、一九五五年から一九七五年までの文学研究論文、小説、歌集等を出版し始めた。

日本の民間援助団体による地道な活動もカンボジアの文化と文学に新たな息吹を与え、甦らせる上でなくてはならないものだった。例えばSV A（旧曹洞宗国際ボランティア会、現シャンティ国際ボランティア会）は長年に渡ってカンボジア文学を保護してきた。一九八〇年からタイ国境にある難民キャンプにおいて、多数のカンボジア語図書を復刻印刷してカンボジア難民に配布し、彼らがたとえ祖国から離れていようと自らの文化文明を記憶し続けることができるよう支援したのである。またSV Aは、上座部仏教を信仰する上で欠かせない『南伝大蔵経』のうちの『三蔵』全百十巻も一九九五年に千二百セット復刻し、主要な寺院に寄贈した。同会をはじめとする日本のいくつかの民間援助団体が協力して、カンボジア唯一の国語辞典、仏教図書、伝統・文化に関する図書などを復刻・寄贈した。

2 一九九三年から一九九六年までの文学

一九九三年にシハヌークが王位に就くことでカンボジアは再び王国となったのだが、シハヌーク国王は文学を含むカンボジア文化を保護する柱となった。それは仏教研究所建設に対する配慮にも伺える。仏教研究所は、一九三〇年に開所されてから

重要な役割を果たしてきたが、将来的に民族の文化を研究・保存していく拠り所としてさらに発展させるため、規模の拡大・充実が計画された。シハヌーク国王は首相に直接書簡を送ることで、移転先の土地を迅速に提供させた。

しかしこの時期当初、文学活動自体はまだ遅々と足踏みしていた。かつて共産主義時代には党中央部や国家政治委員会が内容の細部にいたるまで指導、検閲する機関であった。党の政治要綱に従って表現する指導的文学が良いとされ、このため作家らは皆、自ら創作しようという意欲にも知性にも欠けていた。前進するエネルギーすらないようだった。

出版印刷体制が整っていないのは、当時も現在も変わらな。あまりにも古く、使用不能となった国営印刷所はすべて民間に売却されてしまった。また近代的な出版システムがなかったために、この分野での十分な収益は見込めず、民間企業も投資することができないでいる。読書人口も極めて少ない。すでに発表されている識字率（一九九六年の調査によれば非識字率は六二％）からも明らかのように、文字を読めない人口が非常に多い。さらに国民には本を読むという習慣がなく、理解しやすく娯楽性の高いラジオ、テレビやビデオを視聴するのを好む。よって作家は執筆活動のみで生活することはできない。

一九九三年、サンクム・リアツ・ニヨム時代に存在した「クメール作家協会」がユー・ボー氏によって再設立された。これに伴い、一九九五年末、シハヌーク国王は、「クメール作家協会」を支援し、第一回「シハヌーク国王文学賞」を実施させた。「シハヌーク国王文学賞」小説部門一位は、マウ・ソム

ナン女史の『砂を打つ波』と同一位バル・ヴァンナリリアク女史の『忘れ得ず』であった。同文学賞詩部門一位はソック・ソトン氏の『父さんのいないとき』とポール・ピサイ女史の『人生劇場』が同一位を獲得した。受賞者は王宮で国王と謁見する栄誉に恵まれた。これらのニュースは、地元で最多の印刷部数を誇る日刊紙『リアスメイ・カンプチア』を飾った。また女性作家は『クメール女性の声』という地元民間援助団体の広報誌に取り上げられた。さらにこれらの作品はすべてドイツの民間援助団体から出版された。

マウ・ソムナン女史による小説『砂を打つ波』は全七章から構成され、平易な文章で書かれており、読者が容易に内容を把握できるようになっている。カンボジアの伝統習慣に従うことに価値を見出すフェミニズム的考えをもった女性の話である。主人公である若い女性ボッサバーは懸命に困難に立ち向かい、搾取や売春などに満ち溢れた現代社会の荒みに打ち勝つ。これらの社会的危機は、冷静かつ正義感と愛国心をもった警察官によって救われる、という設定になっている。

マウ・ソムナン女史は、執筆活動だけで生活できる唯一一人のカンボジア人作家である。一九五九年に生まれ、サンクム・リアツ・ニヨム時代に教師をしていた父をポール・ポト政権時代に亡くした。一九八三年ごろから、小説を書き始めるが、作品がはじめて本として出版されたのは、一九九〇年の『貴石の首飾り』であった。その後、テレビドラマの脚本を多く書くようになり、彼女の手がけたドラマは人気を呼んだ。



プノンペンで作家にインタビューする著者（左）

3 一九九七年から現在までの文学

フランスにある海外クメール作家協会は「一九九七年度平和文学賞」の受賞作品として第一位にチアプ・キム・ヒアン氏の小説『対岸の炎』を選び、他三つの名誉奨励賞はカンボジア国内の作家に贈られた。

『対岸の炎』は、フランスにおけるカンボジア人学生グループの生活、人間関係、政治的見解について実証的に語っている。また一九七〇年以前のカンボジアの伝統的な家族の様相を描くことで、カンボジアの文化を、またボル・ポト時代にカンボジアに帰った元カンボジア人留学生の思い出を叙述することで、過去や現在の政治を語ろうとしている。妬み、陰口、報復を捨て去り、非暴力と協力による平和の模索が大胆に試みられている。この作者は、祖国の血塗られた現代史上の悲劇を分析する現実主義的な見解をもち、また運命に打ち勝とうとする二人の登場人物の心情に合わせて、アイロニーをちりばめた響きの美しい言葉を使って綴られている。

カンボジア国内では一九九七年初め、クメール作家協会が、フン・セン第二首相夫妻の支援のもと、ボル・ポト政権崩壊の記念日を冠した「一月七日文学賞」を主催し、第一位はウン・ソック・ヒアン氏の小説『散りゆかぬ日』が受賞した。また第二回シハヌーク国王文学賞受賞式典をモニニアット王妃の出席のもと開催した。

この期間、海外にいるカンボジア人作家は、生まれ故郷から遠く離れた第三国での厳しい生活環境にしようとも、無為に沈黙し、故郷のことを考えなかったわけではない。カンボジア人作家たちは詩、小説、文学研究書などを著し、カンボジア国内

外にいる同胞に伝えようとする努力を怠らなかった。カンボジア人研究者たちは、カンボジア国内にいる外国語のできないカンボジア人学生が科学的に知識を吸収できるよう、カンボジア語で研究書を書き、作家たちはカンボジア語で文学作品を創作している。例えば元カンボジア国立芸術大学教授であり、また現在アメリカ在住のニユオン・カン氏は、一九九九年に三つの作品、『文学作品集』『死せる告発者』『囚人』を発表している。それはカンボジアで起こった二十世紀の悲劇をすべてのカンボジア人に記憶させるために、そしてそのようなことがカンボジアで再び起こらないように書かれたものである。また日本在住のペン・セタリン女史は長編小説『アンコール・ワットの青い空の下で』を書いた。この作品は、シハヌーク国王文学賞にも入選し、また日本語にも翻訳された。

パリにあるカンボジア文明研究資料センターは、一九七八年に設立され、初代センター長はヌット・ナラン氏が務めた。だがその後、彼は新生カンボジアで文化芸術省大臣として国家復興に尽くし、一九九八年七月にはクロチエ州の国会議員として選出された。そのためこのセンターの活動は、一九九〇年から一九九九年まで一時停滞していた。現在同センターは活動を再開し、カンボジア語による雑誌『カンボジアの子』とフランス語、英語、カンボジア語による雑誌『カンボジア研究』を再び発行し始めた。また、同センター長の前書きを新たに加え、ソイ・ヒエン女史による一九五三年の作品である小説『少女ナクリーの悲劇』の復刻版を発行した。

一九九六年以降、カンボジアは政治的にも経済的にも数々の経験を積んだ。ボル・ポトは死に、クメール・ルージュによ

るさまざまな政治活動は終わり、ノロドム・ラナリットとフン・センは同じ政治権力構造におさまった。そしてカンボジアにとって今世紀最後のニュースは、カンボジアがアセアンの加盟国になったことであろう。今日にいたるまで文学は、いまだ未熟であり、援助も受けてはいるが、ゆつくりと歩みを進めている。将来、文学が発展するためには、国内外のカンボジア人が互いに手を取りあつてあらゆる手段をもつて、この幹を強く確かなものにし、先進諸国に追いついていかねばならない。文学は知識、平和、発展、協力、友好を深める社会の根、そして柱となるからである。さらにもうひとつの将来への期待とは、さまざまな文学形態が現れることである。作家自身の嗜好や知識が創作活動に反映されない古い共産主義体制下とは異なり、作家が意見、考え、イデオロギー、哲学、そしてあらゆる知識を交換できるようにする。さらに文学は、祖国への愛情を芽生えさせることによって、カンボジア人としてのアイデンティティーやカンボジア人としての誇りを強めるエネルギーを持ちうる。国内外にいるカンボジアの知識人は、研究書や小説などをカンボジア語で書くことに自らの時間を割き、外国語を解する幸運に恵まれないカンボジア人とその知識を提供するべきである。

今日、世界ではマルチメディアシステムが憂慮するべきほど非常に発達拡大している。カンボジアのしかるべき省庁がこのマルチメディアシステムを総括する方法を探索し、文学を発展させる手段としなければならない。このシステムをもつて文学を踏みにじるのではなく、文明の一端である文学が安定性と進歩性を持つようにするのである。

KHING Hoc Dy (キン・ホック・ディ)一九四五年カンボジア生まれ。一九七一年より在仏。パリ第三大学において博士号取得。現在、パリ国立科学研究所の上級研究員として、古典から現代まで幅広くカンボジア文学の研究に従事している。主な著書に *Contribution à l'histoire de la littérature khmère, vol.1 : l'époque XV-XIX siècle*, L'Harmattan, 1990, *Ecrivains et expressions littéraires du Cambodge au XXème siècle vol.2*, L'Harmattan, 1993, *Aperçu général sur la littérature khmère*, L'Harmattan, 1997, などがある。

(岡田知子)



プノンベン大学で研究発表をする著者